ハードプロブレム

羽黒アキ

令和五年一〇月二六日

あらすじ

ラットの脳を培養し、コンピュータを介して機械の体に繋ぎ、どのように振る舞うか見る研究。先生と助手は、培養されたラットの脳が何を思うかに思いを馳せるが……。

登場人物

先生　女性。脳神経学者。
助手　男性。先生の助手。

利用規定

ニコ生、ツイキャス、声劇会議で純然たる趣味として演じられる場合は報告不要です。その他の場合は一報ください。

録音・録画される場合は、完成品を頂けると非常に励みになるばかりではなく、場合によっては次作へのインスピレーションとなるため非常に喜びます。また、――居ないとは思いますが――有償案件に用いられる場合、営利活動の一環として演じられる場合は著作権使用料が発生しますので必ず事前にご相談ください。

作者連絡先

Skype: gioseffo
Discord: gioseffo
LINE: ex.parrot
Twitter: @Aki_HAGURO
メール: aki.haguro@gmail.com
だいたい掲載順に気づきやすいです。

1　研究室・朝

先生　おはよう。
助手　おはようございます。
先生　脳の様子はどう？
助手　順調ですよ。温度も脳圧も正常値です。
先生　そう、よかったわ。
助手　電気活性を見るに、ちょうど覚醒したところのようです。
先生　そう。(実験装置に近づき) ハーイ、ドリー。ご飯にする？お風呂にする？それとも私？
助手　まだ朝ですよ、先生。
先生　良いじゃない。どうせ相手は実験用のラットなんだし。
助手　ラット……と言って良いんですかね。この状態で。
先生　どうとも言えないわね。
助手　凄いですよね、改めて考えると。ラットの胚(はい)細胞から脳組織を培養し、コンピュータを介して義体に接続して動きを見る……。
先生　今のところは、順調にラットとして振る舞っているわね。外から見た振る舞いという意味では、ラットと言って差し支えないんじゃないかしら。カラダは機械だから、サイボーグラットね。
助手　脳自身はどう思ってるんでしょうね。自己をラットとして認識してるんでしょうか？
先生　それは観測できないからわからないわね。そもそも、人間以外の動物に、自己認識があるかどうかすら判明していないわけだし。
助手　それもそうですね。
先生　それはそうと……ひと雨来そうね。
助手　雨どころか、今夜はハリケーンですよ。天気予報、見てないんですか？
先生　最近テレビを見る暇なんてなかったわ。暇さえあれば、ドリーを見ていたもの。
助手　今晩は泊まりですかねぇ。
先生　私も泊まるから、付き合いなさい。

2　研究室・夕刻

窓の外は強風に加え、強い雨も降っている。

先生　ほんと、雨も風も凄い勢いね。

助手　ハリケーンですからねぇ。

先生　装置は大丈夫かしら。無停電電源装置はあるけれど、それも完全無欠ではないし。

助手　自家発電装置に切り替える間くらいは、もつんじゃないですか？

先生　だといいけれど。

助手　まぁ、本格的に停電したら、万事休すですね。自家発電装置の燃料も無限ではないですし、そもそも電力が弱まります。

先生　そうね。一瞬ならなんとかなるけれど、本格的にそうなったら、終わりね。ドリーには悪いことしちゃうな。

助手　そうですね。まぁ、胚（はい）を取り出し、脳だけを培養し、大量の電極に繋いで、コンピュータと機械の体に繋げてるんです。今でも十分気の毒ですよ。

先生　……それもそうね。

助手　どんな気分なんでしょうねぇ。自分がまさか培養された脳だけの存在だなんて知らないで、研究室の中で研究対象として扱われて。

先生　そんなこと考えてもしょうがないわ。この研究には意義があるの。ドリーは自ら思考し、行動するのよ。これをロボットに組み込めば、自律的に思考するロボットも作れるわ。プロンプトがないと何もできない生成ＡＩとは違う。本当の意味で思考するロボットよ。

助手　生きた脳を使って、ね。その彼または彼女は、何（なん）なんでしょうね。ロボットなのか、サイボーグなのか、我々がまだ定義していない別のなにかなのか。

先生　そのあたりは政治家が遅すぎるくらいのタイミングで決めてくれるわ。とにかく、まずは技術よ。新しいものを作って、実用化を目指さなきゃ。

助手　その脳に意識ってあるんですかね。それは生物なんですかね。

先生　なによ。

助手　例えば人間の脳を培養したとしたら、その脳は人権を主張しますかね？

先生　わからないわ。だって、その脳に意識や自己認識があるかは、観測できないもの。そうなると、予想もできないし、予想すること自体無意味だわ。実際に作ってみないとわからないわね。でも、ヒトの胚（はい）を使うことは、今はできないから、確かめようもないわね。

助手　誰かがこっそりやっちゃったら？

先生　さっきから変よ。何が言いたいの？

助手　実は、作っちゃったんですよ。

助手、部屋の隅に積んである荷物のところに行く。

その荷物には布がかかっていたが、その布を取り払う。

中から、培養液に浮かぶ、無数のワイヤに繋がれたヒトの脳が現れる。

先生　あなた……。

助手　この通り、ヒトの脳を培養したんですよ。さて、この脳は人権を主張するんでしょうか。この脳にに意識はあるんでしょうか。

先生　正気!?

助手　いたって正気ですよ。これこそが私の究極の研究ですから。

先生　じゃぁ、その脳に訊いてみなさい。「あなたは人間ですか？」「あなたに意識はありますか？」って。

助手　だから、さっきから訊いてるじゃないですか。

先生　？

助手　貴女ですよ、あの脳は。

先生　そんなっ……巫山戯ないで。

助手　私は至極真面目ですよ。……そうですね。例えば、貴女は母親の顔が思い出せますか？生まれた街の風景が思い出せますか？

先生　……。

助手　思い出せないでしょう。そのはずです。なぜなら、それらの情報はコンピュータに入力していないのですから。

先生　何を……

助手　貴女の基本的な記憶はすべて、あの脳に繋がるコンピュータに入力されたもの。私の創作です。脳神経学の権威にしたのは、私の研究室に貴女を留め置くためですね。

先生　そんな、私は信じないわ！私には意識も自己認識もあるわ。そんな水槽の中の脳だなんて……。

助手　培養したフル機能の脳ですからね、やはり意識や自己認識があると主張しますよね。予想通りでした。では、証拠をお見せしましょう。

助手、コンピュータのもとに行き、操作する。

先生　!?どうしたの？何も見えないわ！

助手　おっと、すみません。視覚装置のモジュラージャックが半差しでした。……これで見えるでしょう？

先生　この光景は……。

助手　貴女の実験装置、ドリーでしたっけ、そのカラダにコンピュータをつなぎ直しました。

先生　そんな……じゃぁ本当に私は……

助手　ええ。貴女はそこの培養液に浮かぶ、単体の脳に過ぎません。

先生　ちょっと待って、なんでそんな話を今したの？

助手　そろそろバレそうなんで、装置をシャットダウンしようと思いましてね。その前に、ネタばらしして本人と喋ってみたかったんですよ。

先生　そんな、やめて！私は人間よ！

助手　いいえ、貴女は実験装置のイチ部品に過ぎません。

先生　やめて！

助手　それでは、先生。短い間でしたが、楽しかったですよ。さようなら。

先生　やめて、やめなさい。やめ――

言い終わる前に、実験装置の電源が落とされる。

助手　いやいや……。やはり培養脳はヒトとして色々主張しましたか。ロボットに人間の培養脳を組み込むことはできなさそうですね。しかし、彼女の主張する意識が本物かどうか、確かめられないのは非常に残念です。

終劇

あとがき

作中に登場する、「ラットの脳を培養し、コンピュータ経由で機械の体に繋ぐ実験」は、実は実際に行われていたりします。ところで、あなたの脳は、あなたの頭の中にありますか？実はどこかの水槽から無線で繋がってるだけかもしれないですね。

「演じてみた」報告は不要ですが、頂けると励みになります。また、演じた際の録音などを頂けると、飛び上がって喜ぶばかりか、それ自体がアイデアの源泉になったりもします。

最後になりましたが、この本に対する誤字脱字、読みにくい、つまらない等のご指摘は、左記にお願いします。

Skype: gioseffo
Discord: gioseffo
LINE: ex.parrot
Twitter: @Aki_HAGURO
メール: akito.hiyoshi@gmail.com

だいたい掲載順に気づきやすいです。